

男性性と女性性（Ⅱ）

— 私的状況において優越した他者の価値を減損すること —

八 木 保 樹

Masculinity Versus Femininity (Ⅱ) —Derogating Superior Others in Private—

Yasuki Yagi

From the viewpoint of self-evaluation maintenance or social comparison jealousy, a woman who has desirable traits that Subjects do not have is ego-threatening and Ss harbor the motive to derogate that woman but wish to conceal it. However, provided with socially acceptable rationalization for derogation, they can let out that motive. On the basis of this assumption, Yagi (1992) demonstrated that low self-esteem Ss derogated a woman showing femininity and high self-esteem Ss derogated a woman showing masculinity. These experiments were conducted in a context in which evaluations were onymous. In an attempt to extend the finding of this earlier study, an experiment examined how that results are influenced by the private vs public nature of the context in which evaluations of superior others are made. Sixty-six female subjects, after exposed to the essay of a woman showing successfully femininity (for low self-esteem Ss, N=40) or masculinity (for high self-esteem Ss, N=26), read the criticism which was seemingly well-grounded or crudely negative against the way of life expressed in each essay, and evaluated that woman along a variety of trait adjectives. At that evaluation, Ss were told that they might take the criticism into consideration for their information and the form with the criticism was attached to the answer sheets, i.e., evaluations of Ss appeared to be grounded upon the criticism. For about half of Ss, it was emphasized that all of the responses were to be anonymous, and for the rest of Ss, those remained onymous. The results were as follows. Both in public and in private, high self-esteem Ss who read the seemingly well-grounded criticism, compared to those who read the crudely negative one, derogated masculinity of the superior target. Derogating femininity of the superior target by low self-esteem Ss were more pronounced in private than in public.

自尊心は適応の指標であり，説明概念としてのその重要性がさまざまな文脈で指摘される。しかし，一般には，何らかの尺度で測定された自尊心の水準（相対的な高低）だけが問題とされ，測定された自尊心は何に基づいて高められるのかという点が考慮されることは稀である（e.g., Josephs,

Markus & Tafarodi, 1992)。そこで、八木（1992）では、女性の自尊心を取り上げ、その基盤を独自の手法によって同定する実験が行われた。今回はその概要を紹介したうえで新たな実験を報告する。

Horner (1968, 1972) が 成功恐怖 (fear of success) の概念を案出したことはよく知られている。これは 自尊心の基盤として男性性を何より重要とするものと把握できる。この立場はフェミニズムにおいて顕著である。これに対して、Bardwick (1971) は、青年期の「ほとんど」の女子は、それまで男子と同様に発達させてきた学業的成功に代表される達成動機に代わり親和動機が何より重要となる、つまり他者からの愛情を獲得することを「成功」と見なすようになる（したがって「成功」は回避されない）。そして、達成動機を満たそうという欲求は、生じるとしても、親和動機が満たされ、女性としてのアイデンティティが確立された後と推察したのである。Bardwick の立場は 自尊心の基盤として女性性を何より重要とするものと把握できる。

八木（1992）は、成功している女性への反応を見るという形式を前提に、男性性、女性性を発揮する女性を共に取り上げ、両者への被験者の反応を自我への脅威という視点から検討する実験を行った。自分が重要とする対象で同世代の者の相対的優位が示されるという状況は、Tesser (1986) の自己評価維持 (self-evaluation maintenance) モデルによると、自我への脅威となり、そのような状況では、人は社会的比較による嫉妬 (social-comparison jealousy) を抱き、相手の評価を下げようとするのが明らかにされている (Salovey & Rodin, 1984)。

その際、自尊心の低い者が脅威を受け、自尊心の高い者が脅威を受けないものを同定できれば、それを自尊心の基盤と考えることができる。例えば、Horner の立場が正しければ、つまり被験者の女性にとって、自尊心の基盤として男性性が何より重要なら、男性性を発揮している同世代の女性に対し、その自尊心を高めていない者が (自我への脅威を低減しようとして) 相手の男性性を認めたがらない (低く評価する) という結果が見られるだろう。しかし、Bardwick の立場が正しければ、つまり女性性が何より重要なら、女性性を発揮している同性に対し、自尊心の低い者が相手の女性性を認めたがらない (低く評価する)、そして、男性性を発揮している同性に対しては、あり得るとすれば、既に女性性を獲得して安心を得た自尊心の高い者が相手の男性性を認めたがらない (低く評価する) という結果が見られるだろう。

ただし、一般に、被験者が嫉妬などのネガティブな感情を相手に抱いても、評価懸念によって、その本音を表出することを控えると考えられる。つまり自尊心を要因として導入しても単純に回答用紙への記入を要求するだけでは、その高低で差が見られないと考えられる。したがって、本音を表出させる状況が必要となる。そこで「言い訳となる もっともらしい理由 (plausible cause) が整えば、人はネガティブな本音を思わず現すだろう、例えば、自我への脅威を与える相手に対して、その脅威を低減しようとして相手にネガティブな評価を下すだろう」という一般原則を仮定し以下の実験を行った。

八木 (1992, 実験 I)

実験計画 被験者に与える刺激材料である随筆文が二種類用意された上で、随筆文に対する批評文の種類 (この要因を **CRITICISM** とする)、随筆文の主への評価を行う状況 (この要因を **SITUATION** とする) が操作され、個人差として自尊心の高低 (この要因を **SE** とする) が測定される。まず、被験者は、随筆文が与えられるが、その随筆文の種類によって二分される。随筆文は、

女性性を発揮しているものと男性性を発揮しているものがあり、「まだ友達ができない」という一文を除いて、女性性もしくは男性性を発揮し適応している内容となっている。被験者は随筆文を読み、随筆文の主に対する1回目の対人評価を行なう（各被験者のベースラインとなる）。次に、被験者は、随筆文の主に対する批評文が与えられるが、その批評文の種類によってさらに二分される。批評文は、各々の随筆文ごとに、表現が穏健なもの（**not hysteric**より**NH**と略）と過激なもの（**hysteric**より**HY**と略）があり、前者は「まだ友達ができない」を根拠に表面上は論理的に批評しているもの、後者は表面上の論理を無視し独断的な口調で非難し嫉妬があらわなものとなっている。二種類の批評文は、随筆文の主をけなしているという意味内容に違いはないが、表現形式が違っているのである。被験者は批評文を読み、随筆文の主に対する2回目の評価を行なう。その際、「批評文を考慮した上で評価して欲しい」と教示され、しかも評価の回答用紙に批評文を印刷した用紙が貼付けられ、もしネガティブな評価を下すならばその批評文が評価の理由になってしまう状況（**criticism**より**CR**と略）と、批評文は全く別の文脈で読まされ、したがって回答用紙には批評文が貼付けられておらず、評価の理由とはならない状況（**no criticism**より**NC**と略）によってさらに二分される。

結果の予想 1回目の評価は、社会的に望ましい姿を見せようとしてネガティブな評価は控えられる、つまり自尊心の高低で差が見られないと予想される。しかし、2回目の評価は、批評文を評価の回答用紙と共に提出する（**CR**）状況では、一見筋の通った穏健な批評文（**NH**）が与えられる場合と、過激な批評文（**HY**）が与えられる場合とを比較すると、前者は2回目の評価をネガティブな方向に変化させることができる状況となる。ネガティブな方向に変化させても穏健な理由に基づいたのだという言い訳ができるからである。逆に、後者はネガティブな評価が控えられる状況となる。ネガティブな方向に変化させると過激な理由に基づいたことになるからである。したがって**CR**状況では、ネガティブな方向への変化量を従属変数にすると（値が大きいほど2回目の対人評価でネガティブな評価を下したことを示す）、 $NH > HY$ という相対的な差が見られると予想される。この $NH > HY$ は脅威の存在を意味する。一方、批評文が評価の回答用紙に伴わない状況（**NC**）では、まず、**NH**と**HY**は相手をけなしているという意味内容に違いはないので、**NH**と**HY**のどちらが与えられた場合も、変化量に差はないと考えられる。**NH**と**HY**は、表現形式の違いが効果を持たない**NC**状況では、ネガティブな方向へ変化させる誘因の大きさに違いが生じないのである。そして、**CR**状況で**NH**が本音を出すのに十分もっともらしい理由となり、**HY**が本音を控えさすのに十分過激な理由となるならば、確実に安全でも確実に危険でもない**NC**状況の**NH**および**HY**は**CR**状況の間に位置する、つまり、穏健な理由が見つかる場合ほど評価を下げず過激な場合ほど評価を控えないと予想される。**CR**状況では $NH > HY$ 、**NC**状況では**NH**と**HY**で差がなく**CR**状況の**NH**と**HY**の間の値を取るこのパターンを**基本パターン**と称することにする。基本パターンは、「一般原則」を実証するパターンと考えられる。なお、仮に、**NC**状況の値が、**CR**状況の**NH**の値よりも大きくなると、**NH**が十分穏健な理由として不十分であることを、**NC**状況の値が、**CR**状況の**HY**の値よりも小さくなると、**HY**が十分過激な理由として不十分であることを意味する。また、2回目の評価がネガティブな方向へ変化するのは、一般に1回目で見せたい姿を見せていたことを意味するが、**SITUATION** × **CRITICISM**からなる4つの状況が一様に変化するときは、脅威の存在をではなく、ネガティブな内容のステレオタイプを被験者が持つことを意味する。つまり、1回目では、被験者はどの程度望ましい姿を見せればよいかという係留点（**anchor**）がないので、主観に従って評価し

たが、批評文が与えられると、それが係留点となり、望ましい姿に抵触しないと考える程度にネガティブな方向に変化させたのである。

結果 自尊心の低い女性は、女性性を発揮している同性に対して“FEMININITY”において基本パターンを示した (Figure 1)。これは Bardwick の立場に沿った結果である。しかし、自尊心の高い女性は、男性性を発揮している同性に対して“MASCULINITY”において、CR 状況で NH > HY が見られたが、基本パターンを示さなかった (Figure 2)。しかし“FEMININITY”において基本パターンを示した (Figure 3)。これは、いくつかの研究 (e.g., 伊藤・秋津, 1983) が示すように、男性性が安易に否定できない高い社会的価値を持つため、実験 I の NH では男性性の評価を直接下げる理由として不十分であり、そのために、CR 状況の NH では、女性性の評価という間接的な形で、つまり「この人は女性ではない」という評価を下すことで自我への脅威を低減したと解釈することができる。そして、このような形で脅威を低減できるのは、自尊心の低い女性の結果と合わせるならば、自尊心の高い女性が自分には女性性があると見なしているからである (これは今回報告する実験の結果の一部にも反映されている)。女性は、自尊心を高められていないと、女性性発揮の同性に嫉妬を抱く。その際、男性性発揮の同性に対しては、一様にその女性性評価を下げるだけで、つ

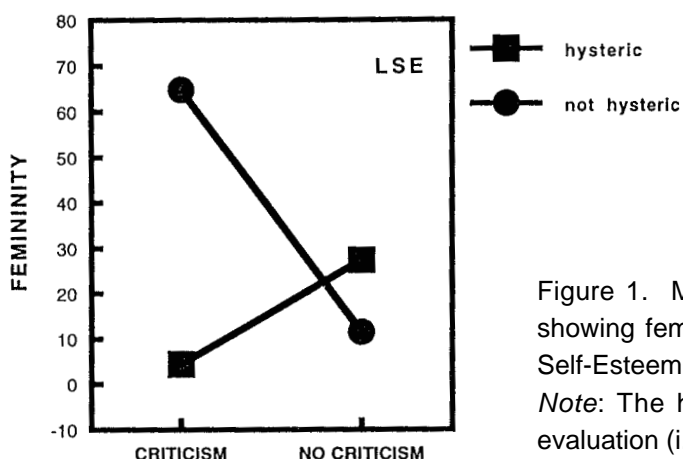


Figure 1. Mean value of “FEMININITY” toward a woman showing femininity for each condition in experiment at Low Self-Esteem

Note: The higher the positive score, the more negative evaluation (i.e., more derogation) against that woman

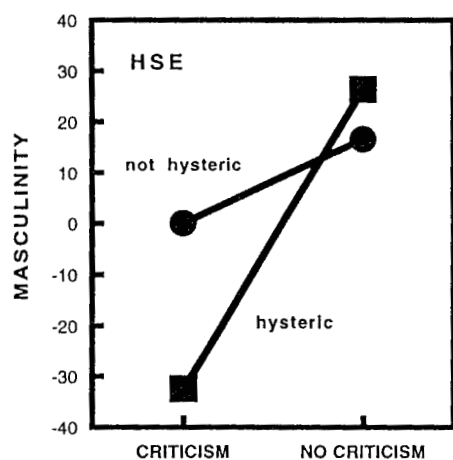


Figure 2. Mean value of “MASCULINITY” toward a woman showing masculinity for each condition in experiment I at High Self-Esteem

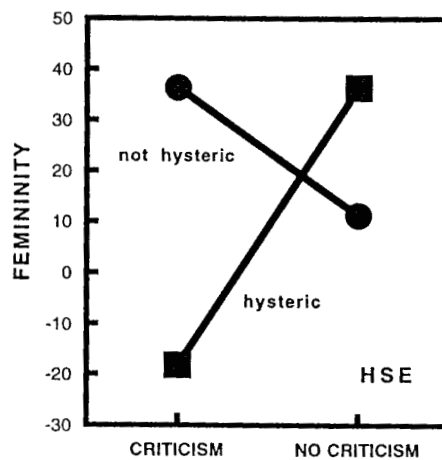


Figure 3. Mean value of “FEMININITY” toward a woman showing masculinity for each condition in experiment I at High Self-Esteem

まり「男性性を発揮する女性は女性性が欠如している」というステレオタイプを持つだけで嫉妬は抱かない。しかし自尊心を高められると、より社会的価値が高い男性性を発揮する同性に嫉妬を抱く。この結果は、女性は女性性を獲得することによって自尊心を高めることを示している。

八木（1992, 実験Ⅱ）

実験計画 批評文が評価の理由となる状況で、かつ自尊心の低い女性（L）は女性性の随筆文を読み、自尊心の高い女性（H）は男性性の随筆文を読むという状況が設定される（この要因を **SE** とする）。そして1回目と2回目の対人評価の間に、自尊心の低い女性には女性性がある、自尊心の高い女性には男性性があるとのフィードバックを与える群（**feedback**より **FB**と略）と与えない群（**no feedback**より **NB**と略、ただし実験ⅠのCR群と同じ）に分けられ（この要因を **FEEDBACK**とする）、実験Ⅰと同様NHとHYの批評文のどちらが与えられるかでさらに二分される（この要因を **CRITICISM**とする）。

実験材料は実験Ⅰのものを利用するが、男性性発揮の女性へのNHは、評価を下げる理由としてより十分なものとするため書き改めた。これによりFigure 2でのNHの値は+の域に入ると予想される。また、フィードバックを与えることでNH > HYは見られなくなるだろう。この仮説は、CR状況のNH > HYの差は、自分にはない重要なものを相手を持っていることが原因ならば、被験者にその重要なものを与えると差は見られなくなるだろうとの予想に基づいている。しかしこの予想は、一時的に作り上げられた自己概念が、現実の基盤を持つ自己概念と同じものかという従来未検討の重要な問題と関わっている。つまり自尊心の研究ではボーガスなポジティブ・フィードバックを与えることで自尊心を高めた状況を操作し、何らかの尺度によって測定された自尊心の高い者と同等に扱って来たが（e.g., Aronson & Mettee, 1968）、基盤を持つ自尊心と持たないものが全く同じ振舞いをするとは思えず、どこかで違いを生じることが考えられる。実験ⅠのCR状況で女性性発揮の女性に対する自尊心の高い者の“FEMININITY”の値は、HY ($M=19.5$), NH ($M=16.0$)である。これを自尊心の低い者（Figure 1）と較べると、NHにおいて差が見られる。フィードバックによって自尊心の低い者が、自尊心の高い者の振舞いを出れるようになる、つまり一時的に作り上げられた自己概念でも現実の自己概念と同じ働きをするならば、NHでもネガティブな評価を下さなくなるだろう。しかしフィードバックの効果が、実験Ⅰでは外的な理由が整えられたのに対し内的な理由つまり「自分は女（男）性性があるのだから相手をけなしてもかまわない」という理由を整えることであるならば、HYでもネガティブな評価を控えなくなるだろう。仮説に関しては、この2つの可能性が考えられるのである。

結果 Figure 4, 5共にNB状況でNH > HYが見られ、実験ⅠのCR状況の結果が再確認された。特にFigure 5では、Figure 2で見られたHYのブーメラン効果（boomerang effect）は薄れたが、予想通りNHの値が+の域に入り、批評文を書き改めた効果が認められた。そして、FB状況でNH > HYが見られなくなった、つまり自尊心の低い女性と高い女性に各々が持たないと考えられる女性性、男性性のフィードバックを与えると、各々がその女性性、男性性評価においてHYでもネガティブな方向への変化を控えなくなり、HYの右上がりの傾きが強調される結果が示され、仮説が支持された。フィードバックの効果は、評価を下げるための新たな理由を整えるという形で見られた。NHの傾きが変わらないのは、理由が整うことでネガティブな評価を下せ、フィードバッ

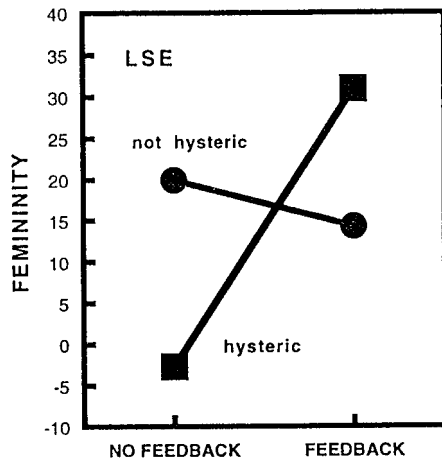


Figure 4. Mean value of "FEMININITY" toward a woman showing femininity for each condition in experiment II at Low Self-Esteem

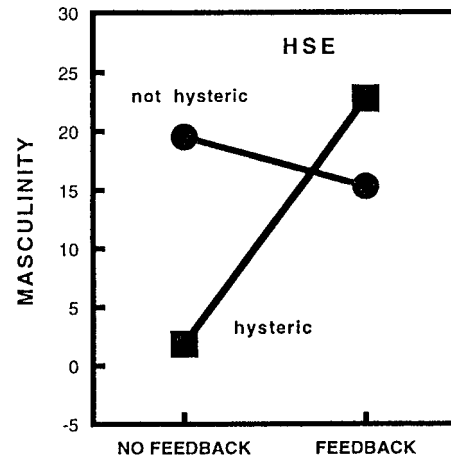


Figure 5. Mean value of "MASCULINITY" toward a woman showing masculinity for each condition in experiment II at High Self-Esteem

クの必要がないためと考えられる。したがって、Figure 5 で NH の傾きが HY と同じく右上がりにならなかったことから、批評文を書き改めた効果は認められるだろう。

今回の実験（実験Ⅲ）

実験Ⅰは、全て、記名条件であったが、ここでは、実験Ⅰの理由あり群を、記名条件と匿名条件で追試して、言い訳の存在が匿名でも効果を持つのかどうか、自尊心の高い者と低い者で、匿名－記名の条件の違い（ANONYMITY）が意味を持つのかどうか、を検討してみよう。

このような条件の設定は、“いったい言い訳は誰の目にとって必要なか”，という一般問題に関連することになる。公的にもっともらしい理由が整えば十分なのか、あるいは、自分自身に理由のもっともらしさを説得する必要があるのだろうか。実験Ⅰの全ての群は記名条件であった。したがって、被験者は、公的な状況にあっても、言い訳があれば、優越者の価値を減損するのである。そしてまた、Greenberg & Pyszczynski (1985) によって、人は私的状況において自我脅威を緩和する戦略を駆使することが捕捉されていることからすれば、言い訳の効果は匿名条件でも見られるだろう。それでは、自尊心の高い者と低い者で何か違いは生じうるだろうか。たとえば、Ferrari (1991) では、自尊心の低い者は、私的状況においてのみセルフ・ハンディキャッピングを駆使することが示されていることから類推すれば、自尊心の低い者は、より、匿名の恩恵を受け、匿名状況では、顕著に、言い訳の存在の効果が見られると予想される。一方、自尊心の高い者にとって、自我脅威を受けた側面とは別のポジティブな自己の側面を提示するような場合、他者は賞賛を得るための観客として重要であるが (Baumeister, 1982; 八木・土山, 1992)、今回のように、いかにもっともらしい理由となっても、相手をけなしていることに変わりはないネガティブな印象を与える言い訳では、他者の存在が、言い訳の駆使にとってより効果があるとは言えないだろう。

今回の実験では、基本的に、自尊心の高い者も低い者も、価値減損の対象は異なっているが（前者は男性性を発揮している女性、後者は女性性を発揮している女性）、共に、CRITICISMの主効果は有意となるだろう。差異が生じるとすれば、ANONYMITYの主効果、もしくはANONYMITY × CRITICISMの交互作用が、他者を意識する度合の強い自尊心の低い者で検出されるだろう。自

自尊心の低い者は、自己の謙虚さをことさら提示するような場合（cf. Steele, Spencer, & Lynch, 1993）を除き、他者の前では、大胆に言い訳を使うことはできない。しかし、自尊心の高い者は、言い訳があるだけで、他者の存在の有無に関係なく、躊躇なく目的を果たすこと（優越者の価値減損）ができると考えられるからである。

実験計画

2（自尊心の高低）×2（批評文の内容：穏健，過激）×2（匿名，記名）の要因配置である。ただし、実験Ⅱと同様、自尊心の高い者は男性性を発揮している女性の作文を読み、自尊心の低い者は女性性を発揮している女性の作文を読むことになる。

被験者

東京大学の女子学生66名。実験Ⅰの基準に合わせて、自尊心尺得点の11点以上を高群（26名）、残りを低群（40名）に分類した。自尊心の高い者についての最小セルの被験者数は5～7、自尊心の低い者は8～12。なお、実験は1991年度に行われた。

手続

自尊心の高低による被験者の分類 基本的には、実験Ⅰにおける「批評文が評価の理由となる群」の手順がそのまま踏襲された。ただし、今回の実験では、自尊心の高い被験者には、男性性を発揮している随筆文を読ませ、自尊心の低い被験者には、女性性を発揮している随筆文を読ませることで節約を図ったので、2回目の対人評価の際に併せて回答させていたパーソナリティ検査の冊子を、被験者を分類するために、実験の開始前に実施するように変更されていた。つまり、インストラクターを装った実験者が、被験者を適当な間隔を置いて着席させた後、実験のカバーストーリーを説明する前に、Fleming & Courtney (1984) の自尊心尺度 24 項目（2件法）が含まれている冊子を配布し、回答を要求した。被験者たちが回答を終ると、実験者は冊子を回収し、「準備があるので、しばらく、静かに待っていて下さい」と告げて、退室した。被験者は、すぐさま別の教室に移って、被験者全員の自尊心得点を算出し、自尊心の高低（H, L）による分類を行った。実験を実施するための材料を抱えて戻ってきた実験者は、「これからある調査をやっていただくのですが、千人に一人くらいの割合で、このような調査に不適当な方がいらっしゃいます。先ほど回答していただいた冊子は、そういった方を事前に除くためのものでした。もちろんみなさんは何の問題もありませんでしたので、本日の作業に入りたいと思います」と説明した。この後は、実験Ⅰの手順と同じく、カバー・ストーリーの付与→1回目の対人評価→1回目の対人評価の意図の説明→2回目の対人評価、という手順を踏み、2回目の対人評価の説明をする際に、記名群、匿名群の割り当てが操作された。

カバー・ストーリーの付与 インストラクターを装った実験者（心理学専攻の女子大4年生）は、「作業の説明」（1・2頁）、「随筆文」（3頁）、「対人評価尺度」（4・5頁）、「あとがき」（6頁）の構成をもつ冊子を配布し、本日は対人評価に関するデータ集めに協力してほしいと告げた。そして、1・2頁を読みながら、私の卒論を指導してくれた先生は、他大学の研究者と共同して独自の対人評価尺度を作成しようとしている。私の卒論は「国語教育歴の差異が文章表現に表れる文法的差異」という先生の研究とは無関係のものだったが、卒論を書くために集めた随筆文を、先生

は尺度作成のために利用し、随筆文をもとにした対人評価のデータを集めてほしいと依頼されたので、インストラクションを手伝っているという状況を設定した。なお、2回目の対人評価との関連を断つための工夫として、冊子の1・2・6頁は、活字ではなく手書きの字で書かれていた。

1回目の対人評価 そして、「都内の女子学生により、今春書かれた」とされる随筆文を、「従来用いられてきた既成の対人評価尺度」を使って抱いた印象を記入するという作業内容を説明し、「この作業は、対人評価における第一印象を記入してもらうことを目的として」といると告げた。また「皆さんには、幾つかの随筆文を無作為に割り当てて読んでいただいております」と、何種類もの随筆文が用意されていることを印象づけ、後で明らかにされる「研究者は、数多くの文章を材料として使用している」という話（後の「研究者からの依頼」における段落②）とつじつまが合わされた。そして、3頁の随筆文を読ませ、次からの対人評価尺度に記入させた。この尺度は、伊藤（1986）の用いた24の特性語に“好感もてる・知的な”などを加えて33項目（2極性，29段階）に構成したもので、後で配布した封筒内の灰色の紙に印刷された“正式”の尺度のコピーであった。被験者はこれを後で知ることになる。これも冊子と封筒との関連を断つための工夫である。

1回目の対人評価の意図の説明 記入の終了を確認後、実験者は、6頁を読みながら、「対人評価は、第一印象に左右されがちであり、先生は精度の高いデータを望んでいるので、先生に渡すものを記入してもらう前に第一印象を取って欲しかったのだ」と、1回目の評価はインストラクターの独自の裁量で行ったという意味づけを行い、「冊子は各自処分してほしい」と告げて、前半の作業を終了した。

2回目の対人評価 休憩の後、「研究者からの依頼」1枚、表紙に随筆文と批評文が貼付けられた灰色の対人評価用紙、及びパーソナリティ冊子が入った封筒を配布するが、数多くの随筆文が用意されている印象を与えるため、識別番号を読み上げ、随筆文の右下の番号と同じ場合に挙手させ、それに応じて配布した。そして、封筒の中の「研究者からの依頼」を読むよう指示するが、今度は研究者が作製したものという形式のため実験者は読み上げなかった。内容は、①研究の主旨、②「手元には、何等かの形の作文や雑誌等からの抜粋があると思うが、それを読んで、『田辺対人認知検査記録用紙』に文章を書いた人物の印象を記入してほしい」、③「回答に関して、研究室より連絡することもあるので、氏名・連絡先を書いてほしい」、④「それぞれの随筆文について、別の女子学生に書いてもらった批評文も付けてある。対人評価を行うにあたり、他者の視点を考慮することも重要なので、それにも眼を通し、それを考慮した上で記入してほしい」という4つの段落より成っていた。読み終わったことを確認した上で、随筆文の主への評価を要求した。

記名群では、実験Ⅰの手続をそのままに、「封筒の中の印刷物にも書いてあるように、後日連絡をさせていただくことがありますので、灰色の対人評価用紙の表には必ず氏名と連絡先を記入して下さい」と強調され、匿名群では、実験Ⅰとは異なり、「封筒の中の印刷物には、必ず氏名と連絡先を記入して下さいとありますが、研究プロジェクトの関係で、連絡する必要がなくなったので、お名前・連絡先は書かなくて結構です」と強調されたのである。

インストラクターの為と称したアンケートの配布 2回目の対人判断の用紙を封筒ごと回収した後は、インストラクターの個人的なデータ収集のためと称したアンケート冊子を配布し、回答後、その回収と共に、1回目の対人判断冊子も回収され、実験は終了した。

アンケート冊子には、「エッセイの立場に共感をおぼえた」とような随筆文の評価に関する2項目、「感想文の内容は私の許容範囲である」とような批評文の評価に関する4項目、「他のみんなも、

私とおなじだ」とする「一緻性増大」に関する2項目、「今回の調査で私は正直に本音を言ったと思う」という1項目、「答えているときに、他人の目を意識して、こんなふうに答えるのは良くないかなと考えたことがあった」という、匿名一記名の操作を確認する他者意識に関する1項目、が含まれていた。21段階評定で、1～21に配点される。

結果と考察

2度の対人評価尺度への被験者の回答を各々因子分析(主因子法・バリマックス回転)し、実験Iとほぼ同じ2因子を抽出した。比較を明瞭にするために、実験Iと同様に“FEMININITY”と“MASCULINITY”の指標が算出された。つまり、“積極的・たくましい”など男性性を表す15項目の合計をM得点(15～435点、高いほど男性性あり)、“思いやりのある・かわいい”など女性性を表す17項目の合計をF得点(17～493点、高いほど女性性あり)とした(“誠実な”は、1・2回目で含む因子が異なり除外)。1回目から2回目のF得点を引いたものを“FEMININITY”(−476～+476点)、M得点を引いたものを“MASCULINITY”(−420～+420点)とした。+は評価を下げ、−は評価を上げたことを意味する。

自尊心の高い者と低い者では、読んでいる随筆文が異なる(自尊心の低い被験者は、女性性を発揮している女性の文章、自尊心の高い被験者は、男性性を発揮している女性の文章を読む)が、まず“FEMININITY”を従属変数にして、匿名性(ANONYMITY)、批評文(CRITICISM)、自尊心(SE)、三要因の分散分析を行ったところ、ANONYMITY × CRITICISM × SEの交互作用が有意となったので($F(1,58) = 4.20, p = .0449$)、自尊心の高低別に、ANONYMITY、CRITICISM二要因の分散分析を行ったところ、自尊心の高い者では、全く有意差は見られなかったのに対して、自尊心の低い者では、ANONYMITY ($M = 29.21$ vs $14.06; F(1,36) = 4.20, p = .0477$)、CRITICISM ($M = 33.95$ vs $11.15; F(1,36) = 11.37, p = .0018$)、共に有意となり、匿名の方が、また、穏健な批評文の方が、値が大きかった、すなわち相手の女性性に関する評価を下げていた。また、交互作用ANONYMITY × CRITICISMも有意に近い値となった($F(1,36) = 3.94, p = .0550$; Figure 6)。

“MASCULINITY”を従属変数にした場合、CRITICISMの主効果のみが有意となった($F(1,58) = 11.83, p = .0011$)。自尊心の高低別に分析すると、自尊心の高い者で、CRITICISMの主効果が有意となり($M = 18.29$ vs $-0.67; F(1,22) = 6.80, p = .0160$)、自尊心の低い者でも、CRITICISMの主効果が有意となり($M = 33.25$ vs $10.95; F(1,36) = 6.35, p = .0163$)、共に穏健な批評文を読んだ被験者の方が、相手の男性性に関する評価を下げていた。

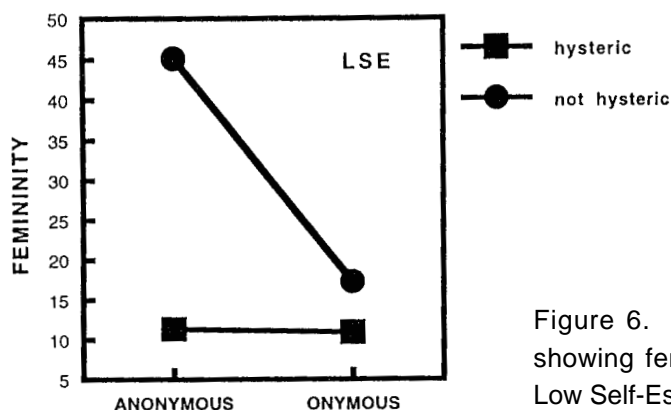


Figure 6. Mean value of "Femininity" toward a woman showing femininity for each condition in experiment III at Low Self-Esteem

自尊心の高低別に“FEMININITY”と“MASCULINITY”の相関をとったところ、自尊心の高い者は .103 ($p=.6158$) であるのに対して、自尊心の低い者は .519 ($p=.0006$) となった。つまり、自尊心の低い者において“MASCULINITY”を従属変数にした場合でも、CRITICISMの主効果が有意となったのは、“FEMININITY”と“MASCULINITY”の強い相関によって“FEMININITY”の場合の効果が維持されたためと判断される。

随筆文の評価に関する2項目を合計し（高得点ほどポジティブ）、随筆文に対する評価の従属変数とした場合、まずSEの主効果が有意となり、自尊心の高い者の方が、自尊心の低い者よりも、高い評価を下していた ($M = 20.04$ vs 11.80 ; $F(1,58) = 13.68$, $p = .0005$)。これは、男性性を発揮した生き方に対して社会が与える高い価値の反映であり、また、既に女性性を獲得して安心した自尊心の高い女性が新たに欲している生き方を肯定したものであるとも考えられる。さらにANONYMITY × CRITICISM × SEの交互作用に有意に近い傾向が見られたので ($F(1,58) = 3.70$, $p = .0595$)、自尊心の高低別に分析したところ、自尊心の高い者で、ANONYMITYの主効果に傾向が見られ、匿名条件よりも、記名条件の方が、男性性を発揮している生き方に対して、高い評価を下していた ($M = 17.25$ vs 22.43 ; $F(1,22) = 3.22$, $p = .0866$)。これは、男性性を発揮する生き方を重視するのは、世間を意識した公的な発言であるという要素があり、女性の自尊心の基盤は、あくまでも、女性性を発揮することにあるという実験Iの結果を確信させるものである。また、女性が、女性性を獲得し自尊心を高めた後も、今度は男性性に対して嫉妬を抱くということと併せれば、自尊心の高い女性は、真の意味で、女性性を選択して、自尊心を高揚させたといえるのか、という大きな問題が暗示されている。Deci (1980) が指摘したように、生きるための内的基準を意識的に自己決定することが必要ということになるのかもしれない。自尊心の低い者では、CRITICISMの主効果が有意となり、穏健な批評文を読んだ被験者の方が、低い評価を下していた ($M = 8.50$ vs 15.10 ; $F(1,39) = 5.60$, $p = .0234$)。これは、脅威を低減できた群の効果が反映していると判断される。

批評文の評価に関する4項目を合計し（高得点ほどポジティブ）、批評文に対する評価の従属変数とした場合、CRITICISMの主効果が有意となり、穏健な批評文の方が、過激な批評文よりも、評価が高かった ($M = 59.65$ vs 41.63 ; $F(1,58) = 22.41$, $p = .0001$)。これは、操作の有効性を示す結果である。

「私の周囲の女の子はほぼ感想文の考え方に近い」に関しては（高得点ほど肯定）、CRITICISMの主効果が有意となり、穏健な批評文を読んだ被験者の方が、周囲の女性も同じような考えであると主張していた ($M = 13.05$ vs 10.28 ; $F(1,58) = 6.01$, $p = .0173$)。これは、批評文の穏健さの反映であるとも考えられるし、穏健な批評文を与えられた被験者が、相手の評価を下げるという「価値減損」の戦略だけでなく、「一致性増大」の戦略を併せて用いた（二重殺）とも考えられる（cf. Snyder, Higgins, & Stucky, 1983）。このことは、次の項目を検討することによって、明確になる。

「あなたが読んだような感想文は、全体の何%を占めると想像しますか」という1～100の数字で回答させる項目に関しては、ANONYMITY × CRITICISM × SEが有意となり ($F(1,58) = 4.21$, $p = .0447$)、自尊心の低い者で、ANONYMITY × CRITICISMの交互作用が有意となった ($F(1,36) = 4.49$, $p = .0410$; Figure 7)。図から明らかなように、匿名条件においてのみ、批評文の違いによって、「一致性増大」の戦略の駆使に違いがみられる。つまり、穏健な批評文を読み、かつ匿名条件にある自尊心の低い被験者は、相手の女性性の評価を下げるだけでなく、自分の価値減損の態度を正当化するために、「みんな自分と同じだ」と言っているのである。

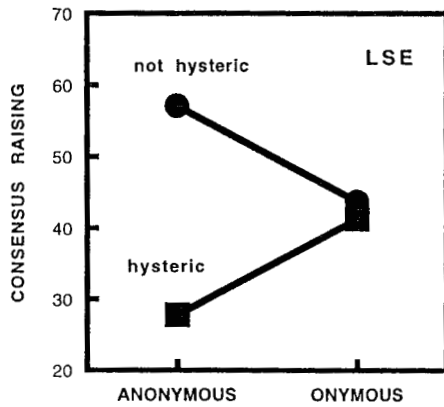


Figure 7. Consensus raising for each experimental condition

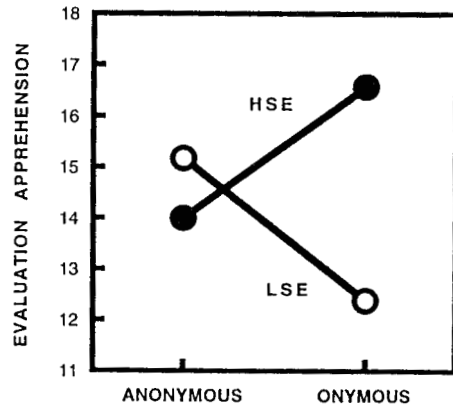


Figure 8. Evaluation apprehension for Law Self-Esteem (Reversal Item)

アンケートに含ませた“本音”の項目では、天井効果のため、自尊心の高い者が、より本音を答えたとする効果しか有意とならなかった ($M = 18.93$ vs 17.25 ; $F(1,58) = 6.07$, $p = .0167$)。“他者意識”に関しては (高得点ほど他者意識なし), ANONYMITY \times SE の交互作用が有意に近い傾向となり ($F(1,58) = 3.17$, $p = .0802$; Figure 8)。記名条件において、自尊心の低い者が、より他者を意識する傾向が確認されている。これは、他者意識の強い自尊心の低い者の特性を確認するものであり、記名操作の有効性を示唆するものでもある。

以上、この実験Ⅲでは、自尊心の高い者、低い者、共に、CRITICISMの主効果は有意となり、さらに、他者意識の強い自尊心の低い者は、匿名条件において、顕著に、言い訳の効果の恩恵を受けること (ANONYMITY \times CRITICISM) が確認された。

引用文献

- Aronson, E. & Mettee, D. 1968 Dishonest behavior as a function of different levels of self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 121-127.
- Bardwick, J.M. 1971 *The psychology of women: A study of biosocial conflict*. New York: Harper and Row.
- Baumeister, R.F. 1982 Self-esteem, self-presentation, and future interaction: A dilemma of reputation. *Journal of Personality*, **50**, 29-45.
- Deci, E.L. 1980 *The psychology of self-determination*. Massachusetts: D.C.Heath and Company.
- Ferrari, J.R. 1991 Self-handicapping by procrastinators: Protecting self-esteem, social-esteem, or both? *Journal of Research in Personality*, **25**, 245-261.
- Horner, M.S. 1968 Sex differences in achievement motivation and performance in competitive and non-competitive situations. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- Greenberg, J. & Pyszczynski, T. 1985 Compensatory self-inflation: A response to the threat to self-regard of public failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**, 273-280.
- Horner, M.S. 1972 Toward an understanding of achievement related conflicts in women. *Journal of Social Issues*, **28**, 157-175.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み— 教育心理学研究, **34**, 168-174.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, **31**, 45-50.
- Josephs, R.A., Markus, H.R., & Tafarodi, R.W. 1992 Gender and self-esteem. *Journal of Personality and*

- Social Psychology*, **63**, 391-402.
- Salovey, P. & Rodin, J. 1984 Some antecedents and consequences of social-comparison jealousy. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 780-792.
- Snyder, C.R., Higgins, R.L., & Stucky, R.J. 1983 *Excuses: Masquerades in search of grace*. New York: Wiley-Interscience.
- Steele, C.M., Spencer, S.J., & Lynch, M. 1993 Self-image resilience and dissonance: The role of affirmational resources. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 885-896.
- Tesser, A. 1986 Some effects of self-evaluation maintenance on cognition and action. In R.M. Sorrentino & E.T. Higgins (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundations of social behavior*. New York: Guilford Press.
- 八木保樹 1992 男性性と女性性—女性の自尊心の基盤に関する実験的研究— 実験社会心理学研究, **32**, 145-159.
- 八木保樹・土山伸二 1992 自己確認の効果を規定する要因について 心理学研究, **63**, 170-180.

(本学文学部教授)